

アメリカ黒人女性作家と新奴隷体験記

— 奴隷制の記憶の受容と克服 —

大 橋 稔

はじめに

アメリカ合衆国における差別の問題を考えると、アメリカ黒人女性は、人種、ジェンダー、階級による差別が交錯した存在である。彼女たちのこのような状況は、アメリカ大陸における彼女たちの歴史が、奴隷という場から出発したことが原因となっている。現代を生きる黒人女性の祖先が奴隷という身分にあったことが、彼女たちにどのような影響を与えているのか。また彼女たちがおかれている抑圧的状况を跳ね除けるために、彼女たちは何をしようとしているのだろうか。

合衆国社会において常に最底辺に位置づけられてきたアメリカ黒人女性の存在は、政治的権力の闘争の歴史として語られがちな歴史において、常に不可視な存在であった。公の場から忘れ去られた彼女たちが存在したこと、生きたことを後世に伝える手段は、祖母から母へ、母から孫へと口承によって語り継ぐことだけであったと言える。この語り継ぐという伝統は、1960年代の公民権運動を経た後も存続し、またアメリカ黒人女性文学として多くの作品を世に送り出すに至っている。

60年代の公民権運動により黒人は、法的には解放され、多くの権利を獲得することに成功した。しかしそれであるにも関わらず、多くのアメリカ黒人女性が、人種やジェンダーなどにより抑圧された状況のもとにおかれ続けている。

その理由は、彼女たちに対する抑圧的な権力装置は、法によってのみ形成されていたのではなく、無意識や感覚、身体レベルにおいて残存する、奴隷制の名残によって形成されたものであったことにある。

本稿ではまず、現代の黒人女性を抑圧し続ける奴隷制の残滓を、身体的意味という観点から明らかにする。その後、現在のアメリカ黒人女性作家によって描かれた新奴隷体験記の分析を通じて、彼女たちが奴隷制をどのように扱い、その名残をどのようにして乗り越えようとしているのかについて考察を行なうことにする。最後にまとめとして、奴隷制を人種差別、性差別の抑圧体制として歴史化させることの意味について、ブラック・フェミニズムの観点から考察を加えることにする。

I. 奴隷制の名残としての身体的意味

身体に付された意味を削ぎ落とすためには、その意味に付された差別的な意思を指摘するだけではなく、その意味の由来がどこにあるのかを明らかにしなければならない。またその「意味づける」権力がどこに存在しているのかを明らかにし、その意図を暴く必要がある。なぜならステレオタイプの問題性は、その都度表象される差別的な意思と共に、ステレオタイプをステレオタイプとして機能させている歴史や社会構造にあるからだ。この差別構造を解体することなく個別のステレオタイプを批判するだけでは意味がない。なぜなら歴史的社会的に構築されるステレオタイプは、時代と共に表象を変容させながら発達してきたのであるから、表象を取り除くことができたとしても、その根幹が残っている限り、新たなステレオタイプを生み出し続けるからである。

1960年代合衆国での公民権運動の影響を受けて、70年代に入ると黒人研究が盛んに行われるようになった。この黒人研究の主要な研究分野となったのが、ステレオタイプに関するものである。ここでは文学や映画などの表象における、黒人に対するネガティブなステレオタイプの研究が行われてきた。それは単に、ステレオタイプの内容を分析し、PC的にネガティブな表象を批判するだけに

留まるのではなく、ステレオタイプの歴史性や社会性、社会に与える影響に関する研究にまで及んでいる。

アメリカ黒人女性にはさまざまなステレオタイプが存在し、それに基づく扱いがなされてきた。彼女たちに付与された代表的なものは、「マミー」「ジェマイマおばさん」「サファイア」「ジェゼベル」^{トラジック・ムラータ}「悲劇の混血娘」などである。これらステレオタイプの多くの原形は、奴隷制時代に築かれたものであった。より周縁へと追いやられてきた彼女たちの身体は、より権力機構の中心に位置するものたちによって都合の良いように意味づけられ、利用され続けてきたのである。また彼女たちの身体に付された記号は、その記号にしたがって扱われることによって更に強化されるという負の連環へと陥っている。

「ジェゼベル」や「悲劇の混血女」は、白人男性が黒人女性を性的に利用するために創出された、黒人女性を性的存在へと定位させるためのステレオタイプであった。このステレオタイプは、奴隷制時代より白人男性が黒人女性の性を搾取し続けてきたことに由来する。この記号が存在することによって彼女たちは、白人男性によるレイプの標的にされ、被害にあい続けてきたにもかかわらず、その責任は彼女たちに押し付けられることになってしまった。更に白人女性たちからは、〈売春婦〉扱いされ、彼女たちの尊厳は傷つけられ貶められてきた。またこのようなステレオタイプが存在していたために、黒人社会においても黒人女性の性は黒人男性によって搾取されることになった。

一方、家内奴隷として扱われたことに基づくステレオタイプが「ジェマイマおばさん」や「マミー」であった。白人の家庭内において、白人の主人の言いつけどおりに、また主人家族のために懸命に尽くし働く彼女たちの姿は、朗らかで包容力があり、多少のことでは動じることがないという、黒人女性のイメージとして定着したのである。そしてこのようなステレオタイプは、白人が黒人の労働を安価な労働力として搾取し続けるためにも必要なものであった。

メイドであった彼女たちは、白人主人の家庭内を〈自由〉に動きまわらなければならなかった。このような〈自由〉を彼女たちに与えるためには、彼女たちの性的イメージを完全に欠落させることが絶対的に必要なことであった。な

ぜなら、彼女たちが白人家庭のロマンティック・ラブの規範⁽¹⁾を乱さない〈安全〉な存在でなければならなかったからである。このようにして成立した「マミー」や「ジェマイマおばさん」というステレオタイプもまた、黒人女性から性的イメージを欠落させることによって成立しているという点において、性と深く結び付けられていると言える。

アメリカ黒人女性には、強い「母親」のイメージも付与されている。社会的に差別を受け続け、教育の機会が剥奪され続けてきた黒人たちは、就業できる職業も制限され、結果として低所得階層へと追い込まれ、白人家庭のように男性のみの収入では家計を支えることが困難な状況に追い込まれてきた。そのため多くの黒人女性たちは、家計を支えるために常に働かなければならず、更には白人女性同様にジェンダー化され、性別役割分業が押し付けられてきたため、男性同様に働きながらも家事をこなさなければならなかった。

また黒人女性たちは、性的存在とみなされ性に関する決定権が剥奪されてきたため、望まぬ妊娠によって未婚の母となることが統計的に多かった。また経済的に最下層におかれる黒人たちは、母子家庭として保護を受けるほうが収入が安定し、より良い生活を維持することができるとの理由から未婚の母を選択する場合もあった。更に黒人女性と子どもたちの結びつきが強いのは、奴隷制時代からの家族体系の名残でもあった。彼女たちの身体は財産を増やすための道具として利用され、父親が誰であるかは明確ではなかった。家族を形成することが困難な状況にあって奴隷たちに与えられた唯一明確な家族関係は母—子どもという関係であった。

このような歴史的社会的状況から、家庭における黒人女性の発言の力は上昇することになった。つまり強い母親というステレオタイプもまた、奴隷制時代の黒人女性のおかれた状況を現代まで引きずることによって形成されたものである。そして現在においては、このステレオタイプが黒人女性たちに、家計を支えるための賃金労働と家事という重荷を背負わせる結果となり、更には黒人女性の力が強いことこそが黒人問題の根源とまで言われ⁽²⁾、社会的歴史的に構築された差別体系の責任まで彼女たちに押し付けられるという現状を生み

出している。

性奴隷制の被害者であった黒人女性であったが、彼女たちの存在は公の歴史からは抹殺され、忘却の淵に立たされることになった。また、彼女たちに対する公的な謝罪や保障がなされていないために、彼女たちの傷は癒されることがなく、現代にまで世代を超えて影響を与えている。更に、加害者の側が彼女たちの身体に性的な意味づけを行うことによって、被害にあったほうにこそ被害の責任があるという言説を流布させているのである。このような影響は、彼女たちの身体に過剰に付与されてしまった意味、ステレオタイプを取り除かなければなくすことができない。

またそのためには、彼女たちの隠蔽された歴史を、公の歴史に定位させることが必要となる。ひとりの人間としての生と性を認めることは、彼女たちを差別し続けている構造を明らみに出すことであり、それによって奴隷制時代から現代に至るまで存続し続けている差別機構の解体を促すことになるからである。この差別機構こそが、意味づけされた身体を生み出す元凶であり、差別を再構築、再強化し続け、ステレオタイプを機能させる原動力なのである。

現代を生きるアメリカ黒人女性作家たちは、このような過去、奴隷制と黒人女性がどのように向き合うことが可能であるかを探っている。以下では、トニ・モリスンとオクテイヴィア・バトラーの作品の分析を行うことにする。

II. トニ・モリスンの『ピラヴド』：記憶の共有による分断からの統一

トニ・モリスンは、『ピラヴド』⁽³⁾において自身の存在の歴史性を認識し、コミュニティと共に生きることを描き出している。そして彼女は、国民全体が健忘症になり、忘れ去ろうとしている物語を語ることを通じて、その物語を歴史の中に定位させ、自分という存在を肯定することができるようにすることの大切さを描いている。

この作品においてモリスンは、分断化されたものが再び統一されていく過程

を多く描き出している。この作品は、時系列が分断され過去と現在を自在に行き来することによって物語が進行する。セタの人生もまた常に分断されていた。奴隷として生まれた母親や父親など家族と分断され、スイート・ホームでは女性奴隷は彼女一人という状況におかれ女性奴隷の連帯から分断され、逃亡の途上で息子たちと分断された。124番地の家では、ビラウドを殺すことにより娘と分断され、コミュニティと分断された。更に幽霊であるビラウドの登場によって、再び息子たちと分断され、デンヴァーと精神的に分断され、ポール・Dとも分断されてしまう。その一方でセタの人生は、再統一の過程でもあった。逃亡の過程において離れ離れになってしまった子どもたちとの再会、ポール・Dとの再会、殺してしまったビラウドとの再会、デンヴァーとの和解、コミュニティへの融合などである。

また人間関係だけでなく、セタの身体もまた分断化されている。「先生」と呼ばれる奴隷監督者によって身体が測定され、人間的な部分と動物的な部分とに分けて記録される箇所、身体的分断が端的に示されている。奴隷である彼女は、一人の人間セタとしてではなく、所有者によって都合の良い身体能力、身体的部位でしか見られることのない存在だったのだ。このような状況に耐えることのできない彼女は、逃亡を決意し、一人の人間として再統一された身体を取り戻そうとするのである。

セタの人生は、常に彼女の望まない分断が課せられてきたにも関わらず、彼女が自身から分断したい、忘れ去りたいと望んだものからは分断されずにいた。彼女にとっては、奴隷体験にまつわる記憶、特に幼い娘を殺してしまったという記憶は、何としても消し去りたいものであった。そのため彼女は、「ビラウド (Beloved)」と記された墓碑を建立することにする。そのとき彼女は、彫刻師から10分間の性行為を対価として要求される。彼女は、もう10分間我慢することができれば、「ディアリー・ビラウド (Dearly Beloved)」と彫ってもらうことができたのかもしれないと後になって考えるが、しかしビラウドの7文字の対価である10分間でさえ彼女にとっては「一生の時間よりも長く」⁽⁴⁾感じられるような苦痛の時間であり、さらに10分間我慢することなどこのと

き考えることはできなかった。結果として彼女は、自らの魂を鎮めることも、殺された娘の魂を鎮めることもできず、子殺しの記憶に常に付きまといられることになってしまう。

またセタを奴隷制の記憶につなぎとめておくものの一つとして、彼女自身の身体に刻まれた傷がある。彼女には、鞭打たれたことによる、奴隷であるがゆえに蒙ることになった大きな傷があった。彼女の身体に刻まれた傷は、それを見るものの息を詰まらせる。最初に彼女の傷を見たのは、逃亡の途上にあった彼女を助けた白人の少女エミイであった。エミイには年季奉公をした経験があったため、それが何を意味するかはすぐにわかった。彼女はその傷を見て言葉を詰まらせるが、「これは木だよ、ルウ。サクラの木だ。(中略)おまえの背中には、木が丸ごと一本生えてるんだよ。ハナざかりさ」⁽⁵⁾と言う。そしてまだ生々しい傷であったセタの木を、彼女がはじめて手当てをするのである。その後、サグスの家たどり着いてからは、ベビー・サグスがセタの傷を治療する。サグスは彼女の傷を「赤いバラ」と表現するが、それは心の中の出来事であって、彼女に直接それを伝えることはない。ただ彼女は傷に薬を塗り、手当てをするだけであった。このように彼女の傷は癒されていくのであるが、その痕ははっきりと残ってしまう。さらに18年後、今度はポール・Dが傷に触る。このとき彼はこの傷を「鉄細工の迷路」のようだと感じはするが、決して口に出すことはない。

白人の少女エミイは辛うじてセタの傷を名付けることができた。しかし一方でサグスもポール・Dもその傷を言葉にして名付けることができない。それは、この傷がセタの身体に刻印された奴隷制の印だからである。これはポール・Dが、「胸の悪くなるような無数の傷の塊」⁽⁶⁾と感じていることから明らかである。セタの背中への傷は彼女自身が見ることはできない。また神経が破壊された彼女の背中には、何も感じることはない。しかしそれでもなお、彼女の背中に存在しつづける傷跡は、明らかに意味を有する表象をなしており、奴隷制を体験した彼／女たちに、その暴力と怒りを思い起こさせるのである。

スイート・ホームから逃亡したセタには、当然のことながら追っ手がかけら

れる。そして彼女たち母子は見つかってしまう。そのとき彼女は、子どもを殺し、自分も死ぬことを思いつく。ここで彼女は、追っ手につかまり農園へ送り返され、子どもたちの安全を守ることができないのであれば、自らの手で子どもたちを安全な場所へ送ろうと考えたのである。奴隷の身体を人間的と動物的な特徴に分けて考える場所、見せしめのために鞭打つことが許される場所、見せしめのためのビッドが埋められ精神を崩壊させる場所。そのような場所に子どもたちが連れ戻されるくらいなら、この手で殺してしまおうとセタは考えたのである。彼女が「もうはいはいしてんの子ちゃん」に手をかけたところで取り押さえられ、そのほかの3人の子どもは無事救出される。そしてこのことが原因となって、セタは周囲から疎まれ、孤立して行くことになるのである。

セタは、さまざまな方法を用いて、過去と現在の分断を図り、過去の記憶を閉ざそうとする。しかしそれらの努力によって彼女が救われることはなかった。結局彼女を救うのは、生きた娘でありながら、彼女の子殺しの罪の意識ゆえに疎外されていたデンヴァーと、子殺しゆえに彼女を疎外していたコミュニティの女性たちであった。コミュニティの女性たちは、心を開き助けを求めてきたデンヴァーの願いによって、彼女たちがセタに対して行ってきた非道と決別し一致団結して彼女を救うため、祈りをささげ、歌を唄うことによって悪霊祓いを行ったのである。こうしてセタは忌まわしい過去から解放され、コミュニティとの再統一を果たすのである。

このように『ビラヴド』では、セタの「心の傷」を乗り越える過程が描かれているが、実は何度か自力で乗り越える機会が存在していた。その一つが、ビラヴドが人間の形相で戻ってきたときである。ビラヴドは、幼い娘が母親にせがむように、セタに対して何度も昔話をしたいとせがむ。その度セタは、重い心の扉を開き、過去に起きた出来事を自分の言葉で語り始める。セタはこの自分の過去を語るという行為に、辛さを感じながらも、癒しを感じてもいる。セタにとってビラヴドは、思い出だけでも辛い過去を語らせる虐待者であるのと同時に、過去との和解を促す救いの存在ともなっている。

モリスンは〈リメモリー〉という造語を用いながら、過去との和解の方法を

『ビラヴド』で示している。キャロライン・ジョーンズによれば、〈リメモリー〉とは、自分の人生に起きたことを想像力を駆使して物語に仕立て上げることである⁽⁷⁾。またその物語を集団の記憶として再構築して行くことでもある。この過程を通じて個人は、共同体に自身の記憶を再定位させることによって、過去の苦しい記憶から解放されるのである。

物語のはじめでセタは、子殺しという過去の出来事に一人で苦しめられ、沈黙のうちに閉じ込められていた。しかし自分の歴史として自分の過去を認識し、独白を行うようになる。その後彼女はビラヴドという独白の聞き手を得て、彼女の独白は対話へ変わる。彼女は自身の記憶を繰り返し語ることが強制され、彼女自身の記憶はビラヴドやコミュニティのメンバーたちに共有されることによって、自身の癒しを手に入れるのである。その結果彼女は、自身の過去と和解し、身体と精神の再統一を図り、人間的な成長を遂げるのである。

セタは子殺しという過去と決別するために、ビラヴドという存在を忘れ去ろうとする。しかしこの行為は、単にセタが殺した娘を忘れるだけではなく、奴隷船の中で荷物として扱われ死んでいった、「名もなきものたち」をも忘れ去る行為でもある。結局セタの、ビラヴドを忘れ去ることによって過去と決別しようとする試みは失敗に終わる。そしてセタは、過去を忘れ去るのではなく、過去と和解することによって成長するのである。モリスンはこの作品を通じて、忘れ去られた過去を語りなおすことの大切さを強調しているのだ。忘れ去ってはならない過去があること、過去と共に生きることの大切さをモリスンはこの作品を通じて記しているのである。このことをポール・Dは「セタ、おまえとおれ、おれたち二人は誰よりも、たくさんの昨日を背負っている。おれたちにならなくて明日が要るんだ」と語り⁽⁸⁾、過去と共に明日を切り開くことが大事であることを示している。

過去を否定・忘却するのではなく、過去を受け入れ、過去と共に明日を切り開く。それは言い換えれば、今あるそのままの自分を受け入れるということでもある。なぜなら、今いる私たちは、過去の積み重ねの終着点として存在しているのであるから、過去を受け入れるということは、あるがままの自分を受け

入れるということなのである。セタの義母、ベビー・サグスは次のように語っている。

ここ、この場所では、私たちは生身の軀。泣き、笑う生身の軀。素足で草を踏んで踊る生身の軀。それをいつくしめ。強くいつくしめ。あそこでは、あの人々はあなたがたの生身の軀を愛さない。(中略)その上、おお、わたしの同胞よ、あの人々はあなたがたの手を愛さない。その手をあの人々は、こき使い、縛り上げ、くくり、斧で切り落とし、虚ろなままに捨ておくだけなのだ。あなたがたの手をいとおしめ！ いとおしめ！ 手を上げて、それに接吻するのだ。その手で他の人に触れるのだ。その手を合わせてたたいてごらん。その手であなたの顔を撫でるのだ。あの人々はその顔も愛しはしないのだから。アナタこそ、その顔を愛さなくてはならない。アナタこそが！⁽⁹⁾

サグスは、息子のハーレの努力によって自由を買い取られたあと、自由黒人として生き、どの教会にも属さない説教師になった。彼女は、生活を改めよとか二度と罪を犯してはならないなどといった、道徳じみたことは何一つ語らなかった。また祝福されしものとか、神の栄光などといった宗教的なことも語らなかった。彼女は、ただ自分自身を愛すること、大切にすることだけを説いていた。

さらにポール・Dは、最愛の宝であるビラウドを失ってしまったことを嘆くセタに対し、「おまえ自身が、お前のかけがえのない宝なんだよ、セタ。おまえがだ」⁽¹⁰⁾と語る。この言葉を通じてモリスンは、そのままの自分自身を愛することの大切さ、そのままの自分自身こそが愛されし者であることを伝えている。自分自身を愛することのできない者が、誰かを愛し、仲間のために生きることなどできないのである。自分自身を否定し、ほかの誰かになったとしても、それは意味ないことなのである。

トニ・モリスンは『ビラウド』を通じて、奴隷制の物語は、あるいは奴隷制

を生き延びた母子の物語は、忘れ去られてはならないことを示した。そしてその過去と共に生きることを通じて、明日を切り開くこと、そのためにはコミュニティと共に生きることが大切であることを示している。この物語の最後で、「人から人へ伝える物語ではないのだ」という言葉が3回繰り返して登場する。しかしこの言葉でモリスンが伝えようとしているのは、これらの物語を語り継いではいけないとか、忘れ去っても良いということではない。この母子の物語は、共同体が一致団結して幽霊退治をしたことによって、共同体の記憶として位置付けられているので、伝える必要すらないということである。その裏を返せば、この物語は忘れてはならないというメッセージである。

一二四番地の裏手の川のほとりで、彼女の足跡が往ったり来たり、往ったり来たり。誰もがその足跡を知っている。誰か、子供か、それとも大人が、自分の足を載せてみると、足と足跡はぴたりと合う。足をのけると、足跡もまた消えて、誰もそこを歩かなかったかのような⁽¹¹⁾。

ビラウドは間違いなく124番地に存在していた。そしてその歴史は、決してビラウド、あるいはセタやデンヴァーだけのものではない。だから誰もが知っているものであり、足跡は誰の足とでもぴたりと合うのである。足跡が残っていないことや名前が残っていないこと。それは存在がなかったことを意味するのではない。その痕跡が残っていない者たちの歴史を自ら内に取り込み、「人から人へ伝える物語ではない」ようにすることが大切なのである。

Ⅲ. オクティヴィア・バトラーの『キンドレッド』：傷の絆による過去の共有

オクティヴィア・バトラーもまた、現在と過去を縦横に横断することによって『キンドレッド』⁽¹²⁾を書き上げている。しかしモリスンが主人公が回想することによって時代を横断させていたのとは異なり、SF作家であるバトラーは

現代を生きる主人公であるデイナ自身にタイム・トラヴェルさせることによって、リアルタイムの出来事として奴隷時代を体験させている。そしてこの体験を通じてデイナは、奴隷制を生き延びた祖先たちの力強さ、その強さがあつたからこそ現代のアメリカ黒人たちが存在していることを学ぶのである。またバトラーは、現代の黒人たちは祖先たちの体験や強さを自らの体内に取り込んで感じる必要があることを示したのである。

デイナは、6回に渡って現代から奴隷制の時代へとタイム・トラヴェルする。この経験を通じて彼女は、奴隷制が如何なるものであつたのかを体験する。現代の人種差別撤廃運動や女性解放運動を経験した黒人女性である彼女にとって、奴隷制時代は何もかもが抑圧された世界であつた。言動や移動は抑圧され、身体の自由や性に関する決定権も剥奪され、生命すら主人に委ねられた世界である奴隷制時代。当然彼女はそのような状況を単純に受け入れることはできない。しかしそれでもなお彼女は、実際に奴隷として扱われ、ほかの奴隷と共に生活することを通じて、現代の感覚から奴隷制のもとにあつた黒人たちを評価するのではなく、実体験の共有者として黒人たちを評価し、彼らの行動には生命を繋いでいくための配慮と知恵がちりばめられていたことを学ぶ。

私は奴隷の部屋には移らなかつた。私は前に炊事場でルークがナイジェルに与えるのを耳にした忠告を受け入れたのだ。「白人衆に口答えはしねえことだ」と彼は言った。「あの衆に『いいえ』と言っちゃならん。こっちが腹を立てているのをわからせちゃいけねえ。ただ『はい、旦那さま』と言うんだ。そうしておいてどんどんこっちのやりたいようにやりゃいいのさ。あとで鞭を食らうことになるかもしれないが、それがどうしてもやりたいことなら、鞭打ちなんぞ大した問題じゃねえやな」⁽¹³⁾。

『キンドレッド』が書かれた1970年代は、特に黒人学生の中に先祖を暴力に抵抗しなかつた弱虫として非難する風潮が存在していた。これは公民権運動や学生運動などによって黒人自身が〈自信〉を回復したことによる影響である。

デイナがこのような考えを有していたのか否かは、作品中に奴隷制時代にタイム・トラヴェルする前に彼女が先祖をどのように考えていたのかに関しては書き込まれていないので不明である。しかしそれは、彼女が特に先祖については何も考えていなかったと読むこともできる⁽¹⁴⁾。そのような彼女が、自らの体験として奴隷制を体験し、奴隷たちが決して何もしなかった訳ではなく、彼女たちの生活には、生き延びるための智慧がちりばめられていること、それを実践していることを学び、現代の感覚から過去を裁断してはならないことを学ぶことの意義は大きい。

奴隷たちは決して弱い、卑屈な存在ではなかった。否、もしかしたら奴隷たちは、現代を生きるデイナたちよりも強い精神の持ち主であったのかも知れない。彼女は自らの体験から奴隷たちの強さを学び、

「このことが始まった時、あなたに言ったでしょう、私には祖先の持っていた忍耐力がないって。今もないわ。あの人たちの何人かは、それがどんなことであろうとも、生き延びるために闘い続けるでしょう。私はそんなふうではないわ」⁽¹⁵⁾。

と語っている。デイナには強さと尊厳が備わっている。しかしそれは、彼女が生きる現代の強さと尊厳なのである。それは時代が変わり、おかれている状況が変われば、当然変わり得るものである。奴隷制時代には奴隷制時代の強さが存在している。そのことを理解するためには、奴隷たちの生を想像的に自らに取り込むことが必要となるのである。

またデイナのパートナーであるケヴィンも、彼女と一緒にタイム・トラヴェルしたことがある。現代においては許されている黒人と白人のカップルであるが、当然当時は許されるはずがなく、白人であるケヴィンと黒人であるデイナは主人と奴隷を演じることになる。しかしこの体験で、人種や性の違いによって見えるもの聞こえるものが異なることが明らかとなる。同じ時、同じ場所にいるはずなのに、デイナには見え感じるのに、ケヴィンには見ることも感じる

こともできないのである⁽¹⁶⁾。現代においてケヴィンはデイナの良き理解者であったはずである。それにも関わらず、人種の違い・性の違いがより大きな意味を持つ時代に戻ることによって、人種と性が二人のあいだに大きな溝を作るのであった。

その後ケヴィンは、一人奴隷制時代に残されてしまう。デイナと離れ、5年の間一人で奴隷制時代を生きることになった彼は、奴隷制即時廃止論者として活動をするようになっていた。権力と主流に逆らって生きる道を選んだことによって、彼は額に傷を受けることになる。例えば白人であったとしても、奴隷制に反対することは命がけだったのである。そして命をかけたこの闘いによって得た傷に、ケヴィンと再会したデイナは強い絆を感じるのであった。

一方デイナもまた、最後のタイム・トラヴェルから現代に戻るとき、左腕のひじから下を失ってしまう。このことは、奴隷制を逃れるためには無傷ではいられないことを示しているのと同時に、現代へ奴隷制の傷を引きずることを意味してもいる。彼女の身体に記された傷は、奴隷制という実際にあった歴史を風化させてはならないこと、奴隷制の歴史が如何なるものであったのかを知るためには、その先祖の痛みを自身の体内に（想像的に）取り込まなければならないことを示しているのである。

またタイム・トラヴェルを通じて黒人であるデイナばかりでなく、白人のケヴィンもまた、奴隷たちが決して奴隷制に屈した卑屈な人間ではなかったことを知る。彼／女たちは、奴隷制という過酷な状況生き延び、生命を受け継いできたのである。デイナは奴隷として主人の性的玩具になるつもりはないという意思を表明するが、ケヴィンはそれに対して「もし君の黒人側の祖先がそんなふうと思っていたら、君はここに存在していないだろうよ」⁽¹⁷⁾と語っている。今ここにいるのは、祖先が生き延び、歴史をつないできたからこそにほかならないのである。

現代に生まれたデイナは、奴隷の女性たちが主人の性奴隷とされたように、あるいは動産として扱われたように、誰かの所有物になることを受け入れることはできない。しかしそれは現代を生きる彼女の考えであって、現代の視点に

基づいて過去の女性奴隷たちを非難することはできない。彼女たちが自らに課された抑圧と闘っているように現代人の感覚からは見えなかったとしても、彼女たちは生き延びることを目指して抗っていたのである。また非難されるべきは、被害を受けた側ではなく、加害者のほうなのである。過酷な状況を生き延び、生命を受け継ぐ知恵を有していた彼女たちは、敬意を払われることがあっても、非難の対象となることがあってはならないのだ。

先祖たちへの敬意は、歴史に名前を残すことがなかったとしても彼／女たちが確実に存在してきた事実を認めることから始まる。ケヴィンは「理解しようとして。あの人たちが存在したという確実な証拠に触れてみたいくて」⁽¹⁸⁾と語る。アメリカ大陸においては白人もまた、歴史に定位されることのなかった奴隷制の遺産の中に存在し続けているのである。そして「あの人たちが存在した」証拠は、デイナとケヴィンの傷の中にあり、今存在している自分自身こそがその証拠なのである。つまり現在を生きている〈わたし〉たちこそが先祖が生きた証であり、先祖たちの歴史を背負った存在なのである。そのことを黒人と白人が共に学ばなければならないのである。

おそらく奴隷制の傷を体内に取り込んだデイナとケヴィンは、人種の違いを超えたより良いパートナーシップを構築していくことになるだろう。左腕を失った後、病院でのデイナと警察とのやり取りなどを通じて、二人の未来が明るいように想像することは難しいことではない。バトラーは黒人であるデイナと白人であるケヴィンの関係を通じて、黒人と白人の未来を明るいものにするためには両者が奴隷制の記憶を（痛みを伴いながら）共有することが不可欠な行為であることを示しているのである。

ま と め

1950年代後半に入ると、アメリカ黒人たちは自らの自由と公民権の獲得を求めた公民権運動を展開し、1964年公民権法、65年投票権法を勝ち取り、表面的にはジム・クロウ法は撤廃されることになった。また公民権運動はほかの

マイノリティの権利獲得運動を誘発し、ブラック・フェミニズムと呼ばれる、黒人女性の権利獲得運動も可視化され、勢いを増すことになった。自らの意思で、自らの権利を主張できるようになったこと。この意味において、奴隷解放宣言や公民権運動は、彼女たちに大きな変化をもたらしたといえる。そしてこのような変化をもたらした彼女たちの運動や闘争には敬意が表されるべきであり、「歴史」として書きとどめられるべき出来事であったといえる。

しかし黒人女性作家たちの主張を追跡するのであるならば、環境の変化とは裏腹に、奴隷制時代より一貫しているテーマがあることも事実である⁽¹⁹⁾。その一つが彼女たちの身体に付与された性的存在としての意味である。黒人女性は、法的には誰かの所有物ではなくなった。しかし女性奴隷が性奴隷として扱われ続けていたという過去が、解放後の彼女たちにも影響を続けていた。彼女たちの性は、白人男性にとっていつでも利用可能な存在と位置づけられ、〈レイプ〉の対象とされ続けたのである。白人男性による黒人女性のレイプ事件は、あまりにも数多く頻繁に発生していた。そのためこれらの事件は、問題にされることもなく、公正に裁かれることもなかった。そのことがこの種の事件を頻発させることになるという、悪循環に陥り、彼女たちに「不道徳」「淫売」のレッテルを貼ることにつながっている。

奴隷体験記を記したハリエット・ジェイコブズやメアリ・プリンスがある程度の年齢に達したとき、性奴隷として扱われる危機に晒され、そこから逃れるためには死か、あるいは死を覚悟した逃亡しかなかった。同様に、アリス・ウォーカーの『メリディアン』⁽²⁰⁾に登場するワイルド・チャイルドや、モリスンの『青い眼がほしい』のピコーラという現代の黒人女性作家によって創り出された黒人少女たちも、性的に蹂躪され、そこから逃れるためには狂気か死しか選択肢は残されていなかった。奴隷制時代から現代に至るまで、黒人女性たちは彼女たちを性的存在に定位させられることへ抵抗し、そこから逃れる術を模索し続けているのである。

またこのレッテル貼りは、黒人女性、特に教育を受けた黒人女性を悩ませることになった。解放された黒人たちには、教育を受けることが公的に許される

ようになった。その結果多くの黒人女性が教育を受け、黒人全体の向上のために貢献するようになった。しかし彼女たちの存在は、黒人女性を「不道徳」な存在と位置づける風潮によって、不可視な存在とされてしまったのである。彼女たちのリアルな姿は、奴隷制時代同様見えない存在とされ続けたのである。

歴史に埋没させられ、歴史から抹殺され続けてきたことへの抵抗もまた、奴隷制時代より今日まで変わらず扱われてきたテーマである。クラフト夫妻は奴隷が法的に非人間として扱われてきた事実を丹念に書き込むことによって、ジェイコブズはコミュニティの仲間と共に生きぬいてきた事実を自伝に記すことによって、アメリカ大陸、合衆国に黒人女性が存在していたことを記し、歴史に彼女たちの体験を書き込むことに挑戦した。そして現代の黒人女性作家たちは、『ビラヴド』のセタが記憶を共同体の記憶として再定位することによって自身の尊厳を取り戻し新たに生きる力を得たように、自らの体験を歴史の大きな流れの中で捉え生きて行くことの大切さを描いている。奴隷制時代から現在に至るまで、黒人女性作家たちは彼女たちから奪われた歴史を取り戻し、彼女たちの歴史を定位させるために抗ってきたのである。

しかし彼女たちの歴史を取り戻す闘いは、決して容易なことではなかった。ジェイコブズができることなら思い出したくない出来事であると綴ったように⁽²¹⁾、また『キンドレッド』のデイナが左手を失ったように、傷を伴う行為だったのである。しかしそれでも彼女たちは彼女たちの歴史を語り継ぎ、歴史に定位させるための闘いに挑んできた。母から娘、娘から孫へと語り継いできたのである。なぜなら彼女たちの経験を歴史から忘却させる力こそが、彼女たちの尊厳を傷つけ、彼女たちの生を不可視なものにしてしまう権力にほかならないからである。そして彼女たちの歴史を彼女たち自身で背負うことこそが、今を生きている証にほかならないからである。

黒人女性が自らの歴史と共に生きること。それは傷を伴う、死と隣り合わせの行為であった。しかし彼女たちは、多くの分断線によって引き裂かれながらも、それでも共に生きることを目指してきた。ハリエット・タブマンが「ジョン・ブラウン・ホーム」の運営資金を得るために自らの体験を語ったように、

クラフト夫妻が英国より帰国した後に黒人のための学校を創設したように、逃亡に成功した奴隷たちは、共に生きるための闘いを行ったのである。またジェイコブズやトルースが多くの仲間を支えられることによって逃亡できたように、仲間が生き抜くために闘ったのである。またセタが共同体の一員であることを取り戻すことによって、デイナがパートナーであるケヴィンとの絆を感じることにによって、仲間と共に生きぬく以外に自身が生き抜く方法がないことを学び、共に生きぬくこととは、今ある自分を愛することであることを学ぶのである。黒人女性たちは、奴隷制時代から現代まで、共に生き抜くことによって自身が生きるために、自らに付された分断線と同じ数だけ、否それ以上の連帯を求め続けてきたのである。

ブラック・フェミニストたちが求めてきたのは、共に生き延びるということであった。そして共に生きる相手は、黒人女性であり、黒人男性であった。また場合によっては、合衆国という地において差別され続けているすべての人々である。彼女たちのフェミニズムは、白人並みの権利を得ることではなく（当然の権利の要求はなされているが）、今居る場所で差別されることなく生きることである。ゆえに彼女たちのフェミニズムは、ほかの誰かになることを志向してはいない。オードリー・ロードはこの点を次のように指摘している。

ブラック・フェミニズムは、黒人の顔をした白人のフェミニズムではない。黒人女性、黒人女性としての生活に影響を及ぼすような特別で正当な問題を抱えており、これらの問題を扱うことで自分が黒人らしさを失うことはない⁽²²⁾。

今あるまま、自分のまま、自分らしさを捨て去ることなく、差別されることなく共に生きることができる社会。それがブラック・フェミニズムが求める社会なのである。

奴隷制時代に比べると、黒人女性を取り巻く環境は大きく変わった。しかしその一方で変わらずに彼女たちの間で受け継がれてきた闘いや運動も存在して

いる。この変わらず受け継がれてきた彼女たちの生の足跡が、いつでも利用可能な歴史へと昇華したとき、つまり〈リメモリー〉されたとき、1619年から現代まで続く彼女たちの、生と性の尊厳をかけた闘いが終結へ向けての一步を踏み出すことになるのではないだろうか。

〈注〉

- (1) 男女による「性・恋愛・結婚」が三位一体であるべきだとする規範。
- (2) 1965年、社会学者ダニエル・パトリック・モイニハンは「黒人家族：国家的行動を要する症例」（通称モイニハン・レポート）を発表した。この中でモイニハンは、黒人家庭において母親の権力が強いために、男性が役割を果たすことができずにいるとしている。それを矯正するためには、黒人男性を女性的世界である黒人家庭から引きずり出し、男性的世界である軍隊などで男性であることについて再教育する必要があるとしている。モイニハン・レポートに触発された男性研究者や白人研究者は、彼の結論を踏襲し、黒人家庭が抱える問題、若年層黒人の反社会的行為の原因を黒人家庭の家母長制に求めるようになったのである。
- (3) 『ピラヴド』の概要は次の通り。

セタは、奴隷に対して寛大な態度で接する奴隷主ガーナー夫妻のもと、スイート・ホームと呼ばれるプランテーションで働いていた。しかし主人ガーナーの死後、監督としてやってきた「先生」の登場によって状況は一変する。「先生」は非人道的な監督であり、奴隷を人間として扱うことはなかった。そのような状況から抜け出すため、セタは子どもを連れて逃亡する。このとき夫ハーレーも一緒に逃亡するはずだったが、彼が姿を現すことはなかった。このとき身重だったセタは、先に子どもたちを逃がす。逃亡の途中で彼女は、白人の少女エミイの助けを借りて、出産する。この時生まれたのがデンヴァーである。その後、無事124番地にある姑サグスの家にたどり着く。子どもたちと再会したセタは、わずかな間ではあるが、幸せな家族との時間を持つ。しかし追っ手に捕まりそうになった彼女は、子どもたちを奴隷制に連れ戻されるくらいならと考え、子どもたちの命を奪うことにする。この時実際に命を奪うのは、「もうはいはいしてんの子ちゃん」と呼ばれていた娘だけである。セタはこの子どものために「ピラヴド」と刻印された墓碑を建立する。124番地の家は、子殺しの事件以降、正体不明の幽霊に憑かれ、怪奇現象を起こすようになる。そのような状況の中、二人の息子はセタに殺されそうになったことなどを理由に家を去り、サグスも失意の中他界する。セタとデンヴァーだけが残された124番地の家に、かつての奴隷仲間であったポール・Dが現れる。彼は幽霊を追い出し、束の間の静かさを取り戻すが、幽

霊の次に現れたのは、ビラウドと名乗る正体不明の少女である。ビラウドはセタが殺した子どもの亡霊である。ビラウドはセタを独占することのみ関心があり、ポール・Dを家から追い出し、セタのことも精神的、肉体的に追い詰めていく。セタ一家を、子殺し事件を契機に疎外していたコミュニティであるが、助けを求めてきたデンヴァーに応じて、団結して悪魔祓いを行う。この一件を経て、セタたちはコミュニティと和解し、またポール・Dも戻ってくる。

- (4) モリスン『ビラウド』(上): 14 頁。
- (5) モリスン, 同書: 155 頁。
- (6) モリスン, 同書: 43 頁。
- (7) Carolyn M. Jones, “*Sula and Beloved*,” を参照。
- (8) モリスン『ビラウド』(下): 267 頁。
- (9) モリスン『ビラウド』(上): 172 頁。
- (10) モリスン『ビラウド』(下): 267 頁。
- (11) モリスン, 同書: 270 頁。
- (12) 『キンドレッド』の概要は次の通り。

作家志望の黒人女性デイナは、1976 年の誕生日、突然、ロサンジェルス of 自宅でめまいに襲われる。気がつくとそこは外で、目の前の川で少年が溺れかけていた。その子を救出し、救命処置をしていると、父親らしき男性に銃を突きつけられ、死の恐怖を感じる。この時まためまいを起こした彼女は、気がつくと LA の自宅に戻っていた。そしてパートナーの白人男性ケヴィンから、数秒間姿が消えていたという事実が伝えられる。同じ日に再びめまいに襲われたデイナは、気がつくと、先ほどの少年が少し成長しており、部屋のカーテンに火を放っている現場居る。この時彼女は、1815 年、メリーランド州のプランテーションにタイム・トラヴェルしていること、少年の名前はルーファス・ウェイリンで、彼女の先祖に当たる人物であることを知る。このタイム・トラヴェルで彼女は、ルーファスが命の危険に晒されると、この時代に呼び戻されること、また現代に戻るには自らの命が危険に晒される必要があることを知る。そして少なくとも、ルーファスが成長し、幼馴染の黒人少女アリスとの間にデイナの先祖であるヘイガーが生まれるまでは、彼を守らなければならないことを覚悟する。結局彼女は、6 回にわたってタイム・トラヴェルすることになる。最後のトラヴェルのさい、彼女はルーファスに性的に襲われそうになり、彼を刺してしまう。ルーファスは薄れ行く意識の中デイナの左腕をつかみ放さない。そのまま現代に戻ってきた彼女は、左腕のひじから下を失っていた。3 回目のタイム・トラヴェルのさい、ケヴィンもデイナと一緒に過去へ行く。そしてこの時、ケヴィンは一人過去に取り残されてしまう。5 年の歳月を一人過去で過ごした彼は、奴隷解放運動に参加し、額に傷を負うことになった。

- (13) オクティヴィア・バトラー『キンドレッド』: 126 頁。
- (14) デイナが過去ヘタイム・トラヴェルするのは、彼女の先祖であるルーファスが生命の危機に晒されたときである。ルーファスが子孫を残すことによって、デイナが誕生するのであるから、ルーファスがその責任を果たす前に死んでしまえば、デイナという存在も消滅してしまう。この意味において、子孫であるデイナが祖先の生命を守らなければならないのは、物語として当然の成り行きであると言える。しかしなぜ過去に呼び戻されるのがデイナであったのか。ルーファスの死によって存在が消滅するのは、デイナだけではなく、デイナの母や、後に生まれるであろうデイナの子どもも同じように消滅するのであり、この誰が呼び戻されても良かったはずである。ここにバトラーの意図が隠されている。
- 歴史上の人物は二度死ぬ。一度目の死は身体的な文字通りの死であり、二度目の死は忘れ去られることである。デイナが 1970 年代の祖先を蔑視するような風潮を受け入れていたとするならば、それはルーファスの二度目の死を意味することになり、ルーファスは死の危機に瀕していたのである。またそれは自らを根無し草の存在にすることにも等しい。故にルーファスの危機を救うために呼び出されるのは、デイナでなければならなかったのだが、それはデイナ自身を救うことでもあったのだ。
- (15) バトラー、同書: 337-338 頁。
- (16) デイナとケヴィンはあるとき、森の中で奴隷の子もたちが奴隷市場の競りの真似事をして遊んでいるのを見かける。このとき彼女は、遊びまだが奴隷の子もたちに「将来の覚悟をさせる」機能があることに憤りを覚える。しかしこれに對してケヴィンは、「デイナ、君は子供の遊びを深読みしすぎると」と応える(『キンドレッド』: 130-31 頁)。
- (17) バトラー、前掲書: 337 頁。
- (18) バトラー、同書: 363 頁。
- (19) 奴隷制時代に書かれた作品のテーマについては、拙稿「アメリカ黒人女性の奴隷体験」および、拙稿「記憶と自由の予期」を参照。
- (20) アリス・ウォーカー『メリディアン』については、拙稿「アメリカ黒人女性文学に描かれた歴史」を参照。
- (21) ハリエット・ジェイコブズ『ハリエット・ジェイコブズ自伝』: 407-08 頁。
- (22) Audre Lorde, *Sister Outsider*, p. 60.

引用・参考文献

- Anderson, Lisa M. *Mammies No More: The Changing Image of Black Women on Stage and Screen*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 1997.
- Bradford, Sarah H. *Harriet Tubman: the Moses of her People*. [1886] Secaucus, NJ:

- Citadel, 1961.
- Butler, Octavia. *Kindred*. [1979] Boston: Beacon, 2004. (風呂本惇子ほか訳『キン
ドレッド：きずなの召喚』山口書店, 1992)
- Jones, Carolyn M. “*Sula and Beloved: Images of Cain in the Novels of Toni Morrison*.” *African American Review*. 27-4 (1993): 615-626.
- Craft, William and Ellen. *Running a Thousand Miles for Freedom: or, the Escape of William and Ellen Craft from Slavery*. [1860] Ed by William L. Andrews et al. *Slave Narratives*. New York: Library of America, 2000. 677-742.
- Jacobs, Harriet. *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. [1861] Ed by Jean F. Yellin. Cambridge, MA: Harvard UP, 2000 (小林憲二編訳『ハリエツト・ジェイコブズ自伝：女・奴隷制・アメリカ』明石書店, 2001)
- Lorde, Audre. *Sister Outsider*. [1984] Berkeley: Crossing, 2007.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. [1970] London: Picador, 1990. (大社淑子訳『青い目がほしい』朝日新聞社, 1981)
- . *Beloved*. [1987] New York: Plume, 1988. (吉田廸子訳『ビラウド』(全2巻) 集英社, 1990)
- Moynihan, Daniel Patrick. “The Negro Family: The case for National Action.” (<http://www.dol.gov/oasam/programs/history/webid-meynihan.htm>)
- Walker, Alice. *Meridian*. [1976] London: Women's P., 1982. (高橋茅香子訳『メリディアン』朝日新聞社, 1982)
- 岩本裕子『アメリカ黒人女性の歴史：二〇世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』明石書店, 1997
- 『スクリーンに見る黒人女性』メタ・ブレーン, 1999
- 大橋 稔「アメリカ黒人女性文学に描かれた黒人女性史：アリス・ウォーカー『メリディアン』におけるメタファーの意味」『かりん かりん：女性学・ジェンダー研究』第5号(2005)：3-20
- 「アメリカ黒人女性の奴隷体験：ブラック・フェミニズムの源流を探して」『城西人文研究』第29号(2006)：21-49
- 「記憶と自由の予期：アメリカ史における黒人女性の語り」岡野八代編『自由への問い7 家族：新しい「親密圏」を求めて』岩波書店, 2010